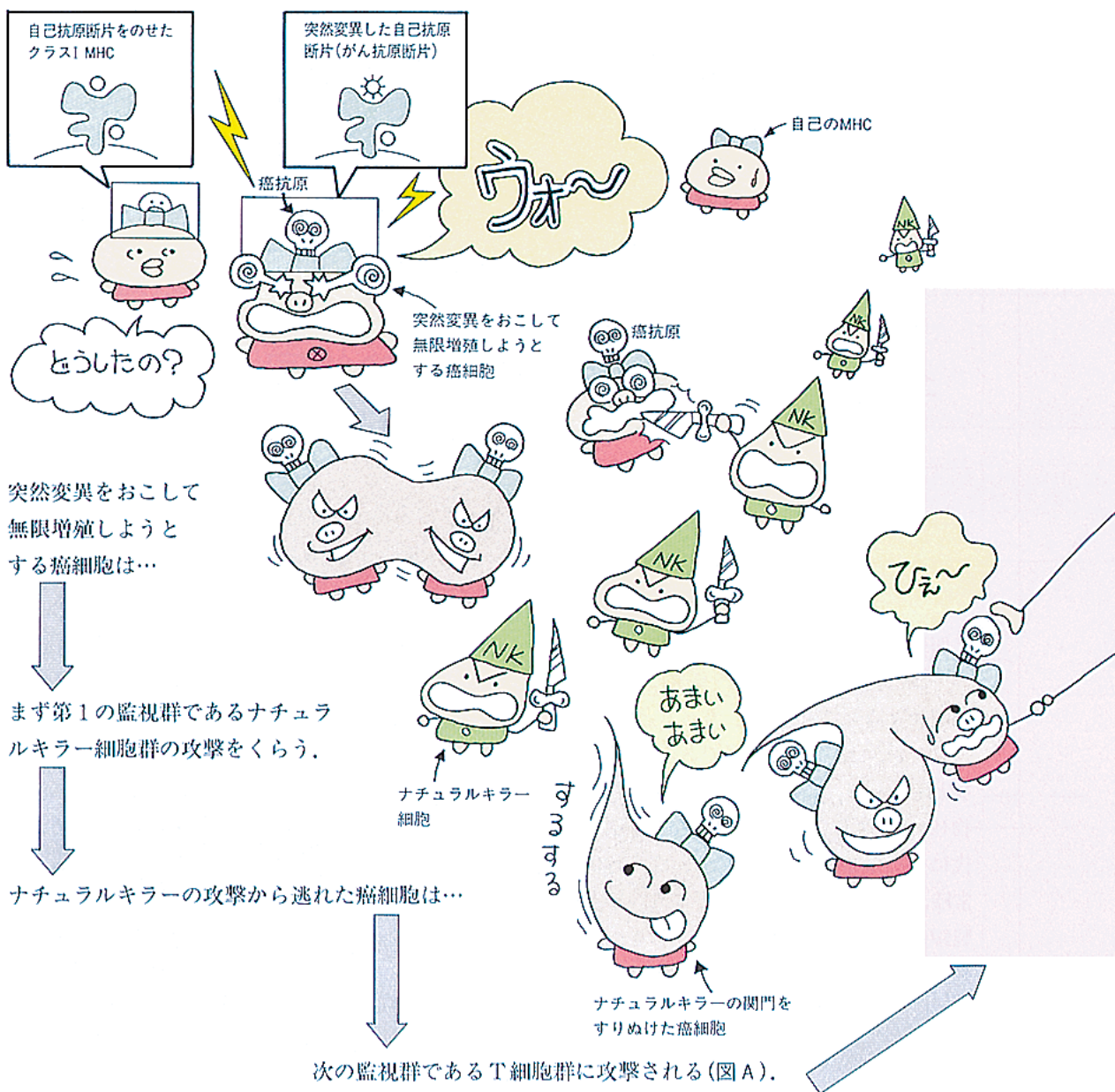


第8回 癌と免疫との闘争

萩原 清文* 作

多田 富雄** 監修

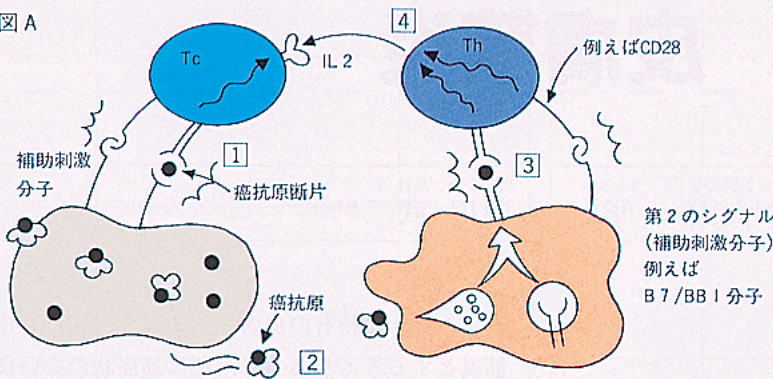
免疫反応から逃れ、無限増殖しようとする癌細胞。今回はそのずるがしこい様子をのぞいてみたい。



* 東京大学医学部

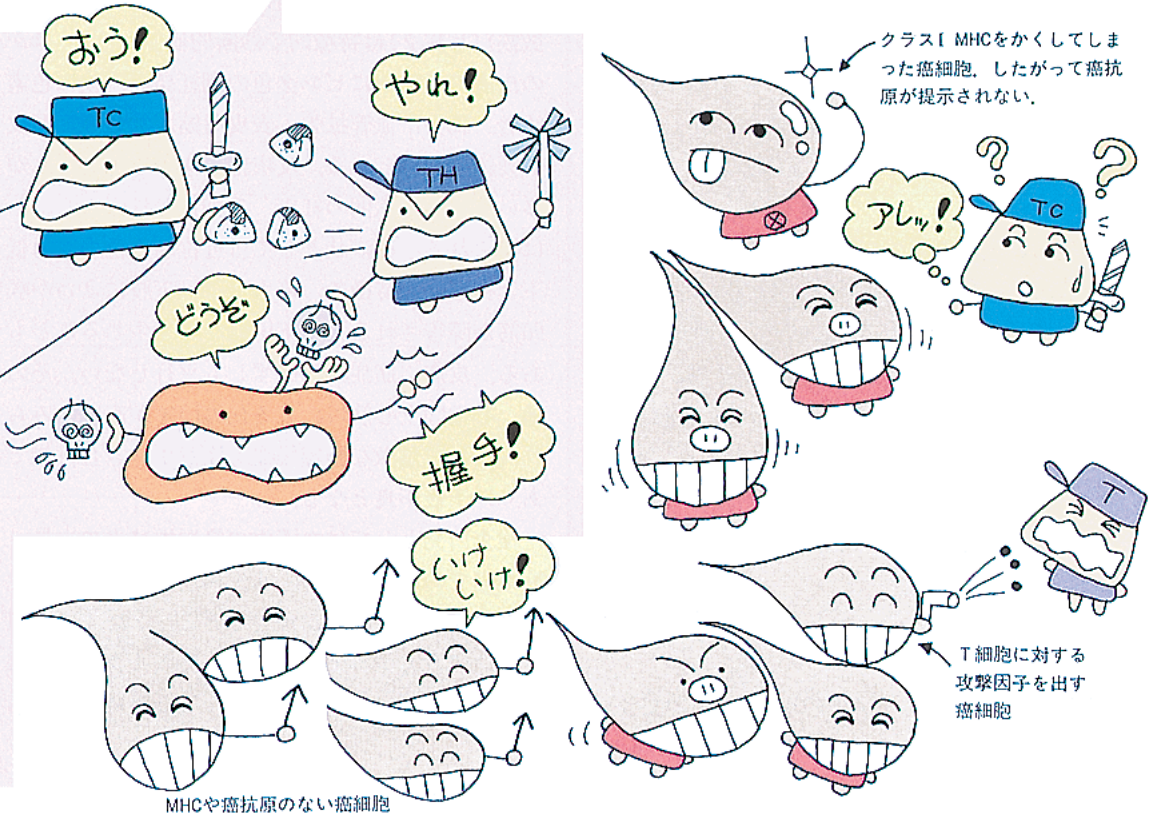
** 東京理科大学生命科学研究所々長

図 A



- 1 キラーT細胞による癌抗原断片の認識とインターロイキン2 (IL2) 受容体の発現
- 2 マクロファージによる遊離癌抗原の貪食
- 3 マクロファージによるヘルパーT細胞の活性化 (第2のシグナルがないとT細胞は無反応[アネルギ]になる)
- 4 ヘルパーT細胞によるキラーT細胞の活性化

しかし、ある細胞はクラスII MHCやT細胞を刺激する補助分子 (B7/BB1等) をかくすことによってT細胞の攻撃からのがれる。またある細胞はT細胞に対する攻撃因子 (TGFβ) がその1つと考えられている) を分泌して免疫反応を抑制する。



MHCや癌抗原のない癌細胞

かくして免疫系の監視からのがれた癌細胞たちは個体をむしばんでいくのであった。

このような細胞たちに、再びT細胞を活性化する分子 (例えばB7/BB1分子) を再発現させる試みが現在実験室レベルで進行中である。